新興大学からみた高校と大学の関係

武内　清

1. 学生文化の変化

日本の1960年代以降の学生文化の流れを見てみると，「対抗文化」の時代（60年代）→「大学レジャーランド」の時代（80年代）→「バブル期の大学生」（90年代）→「不況期の大学生」（90年代後半以降）と大きく変化している。

大学レジャーランド時代の大学生やバブル期の優雅な大学生の姿を今の学生たちに紹介すると，「すごくだらしない生活」「大学に行っている意味がわからない」「授業料を払ってくれる親に申し訳ない」という感想が返ってくる。それだけ，今の学生は不況期の中で真面目化している。同時に通う大学に満足している。

筆者らが行った7大学調査のデータで見てみると，授業への出席率は，1997年の62.3%から2013年の87.7%へ上昇している。また「授業に満足している」という学生も増えている（26.8%から49.8%）。「学科やクラスの友人関係」や「部やサークルの人間関係」に満足しているという学生も増えている（それぞれ13.9%，18.0%増）。「今の大学への満足度」も，66.7%から75.9%と9.2%上昇している（武内，2015，pp57-68）。このように，現代の大学生の授業，人間関係，そして大学への満足度は上昇している。

それは，どこの大学でも同じことである。この学生の真面目化現象や満足度の上昇は，大学生の「生徒化」と言いかえてもよい。「生徒化」とは，教師に言われたことに従順に従い，授業に出席し単位を習得しようとする傾向である。

それだけ，卒業後に出ていく社会の雇用状況は厳しく，学力も資格もないまま卒業しては，将来が危ない（フリーターになってしまう）という危機感を学生たちは抱いている。

一方，大学も「学校化」している。文部科学省の高等教育政策もあり，大学教員はシラバスを作成し，授業では出欠を取り，アクティブラーニングを取り入れ，学生の授業参加を促す工夫をさまざまにしている。

以上のように時代と共に大学や学生文化は変化してきたが，もう一方で大学も学生も多様化しており，一様にとらえられない面がある。

2. 大学進学でみる高校と大学の関係

我々が2013年に実施した14大学の調査で高校生の大学選択理由をみると，「学びたい専門分野があるから」（58.4%）という理由が一番多い。そして「有名だから」（17.4%）という理由は少ないが，「自分の学力（偏差値）にあっているから」（36.5%）はかなりある（武内2015，p13）。高校生は，学びたい学問分野（それは将来の進路と結びつく資格と連動している）を重視しながら，自分の学力レベル（偏差値）にあった大学を選んでいる

そして，昔のように浪人してでも，偏差値の高い大学に入ろうとするよりは，自分の今の成績相応のレベルの大学に，推薦やAO入試で入れればいいと考えるものが多い。一般入試でもそれほど無理はしない。

その結果，高校生の在籍する高校のレベル（偏差値）と進学する大学のレベル（偏差値）がほぼ一致している。

「難関大学に進学する生徒の多い高校」の出身者の割合は，偏差値の60以上のA大学では81.9%，偏差値が50台のH大学で38.6%，50以下のW大学で10.0%である（武内2015，p206）。つまり，進学先の大学は，高校のレベル（偏差値や過去の進路実績）でかなり決まってしまう。「大学創設年」「偏差値」「大学規模」の3つで，大学を類型化してみると（武内，2005），偏差値の高い「伝統総合大学」には，進学校出身の学生が多く，偏差値の低い「新興大学」には，偏差値で中以下の高校から入学していることがわかる。「中堅校」は，その中間に位置する。

それでは「新興大学」には，どのような学生が入学しているのであろうか。大学全入時代になり，そのような「新興大学」には，勉学意欲も目的意識もなく，何となく大学に入り，遊びやアルバイトに明け暮れる大学生が多いのであろうか。またそこの大学教員たちが，勉学の意欲のない学生に困り果てているのであろうか。その実態を，データや学生の声からみてみよう。

3. 大学類型によるキャンパスライフの違い

大学進学動機は，大学類型によりかなり違う。偏差値の高い「伝統総合大学」では，「自分の将来の進路や仕事について考えるために」（「伝統総合」64.4%，「中堅」57.3%，「新興Ⅰ」55.6%，「新興Ⅱ」52.4%）が多い。それに対して，偏差値の低い「新興大学」では，「資格などを取るために」が圧倒的に多い（「新興Ⅱ」57.5%，「新興Ⅰ」41.3%，「中堅」38.8%，「伝統総合」9.0%）（武内2005，p12）。「伝統総合大学」では，教養，モラトリアム志向が強いのに対して，「新興大学」では，実学，資格志向が強いのである。

学生生活の比重をみると（表1），どの大学類型でも「友人との交友」が高い。「伝統総合大学」では「サークル・部活動」の比重が高く，「新興大学」では「趣味」の比重が高い。「学業・勉強」の比重は，大学類型差があまりないことに注目したい。「新興大学」の学生の勉学の比重が低いわけではないのである。

「新興大学」の学生は，高校まではあまり勉強をせず，部活動などに打ち込んできたものが多いが，大学では資格を習得して，それによって就職したいと考えている学生が多い。また大学も学生に資格を取らせ，就職実績を上げ，就職率の高さをアピールしようと考えている。教員も学生の就職試験対策に手を差し伸べることが多い。個別の指導も丁寧に行う。

教員との関係の満足度をみると，「満足している」割合は，「伝統総合」26.9%，「中堅」26.1%，「新興Ⅰ」27.9%，「新興Ⅱ」35.6%と，「新興大学」で高くなっている。「新興大学」の教員の面倒見の良さが，数字に表れている。

表1　大学生活の中の比重（「大部分」＋「かなり」）　（%）

	伝統総合	中堅	新興Ⅰ	新興Ⅱ
学業・勉強	55.8	52.7	48.1	48.8
サークル・部活動	42.4	36.7	25.4	21.5
アルバイト	38.7	46.7	51.2	36.4
趣味	46.3	47.0	49.2	52.7
友人との交友	66.2	64.2	68.0	67.5
異性との交際	23.7	31.5	34.8	27.9

（武内2005，p21）

4. チャーター効果について

教育の効果を内部ではなく外部に求めるチャーター理論がある。それによると個々の大学に対する社会的定義や期待が存在し，それが当該の教員にも学生にも内面化され，その社会的期待に応えるべく教員も努力し，学生も社会化される（武内2014，p71）。

有名大学の教員が高い業績を上げるのも，有名大学の学生が高い就職実績を勝ち取るのも，この大学チャーター（社会的期待）のお蔭によるところが大きい。

たとえば有名大学の教授は，すぐれた論文を書き，学会で活躍し，国や各種審議会の委員として活躍することが期待され，その期待に応える。有名大学の学生は，4年間大学教育から何も学ばなくても，その大学の学生という社会的期待（レッテル）を背負い生活していく中で，その大学生らしい（たとえば優秀でバンカラの）特質を身に付け卒業していく。

このチャーター効果は，有名大学に対して働くことは考えられるが，「新興大学」の教員や学生にどのような働きをするのであろうか。「誰でも入れる大衆大学」「偏差値の低い大学」「学習意欲の低い学生の集まった大学」というチャーター（役割期待）を教員や学生は抱き，自己成就してしまうのであろうか。

ここでは，「新興大学」の学生のコメントから見ていきたい（武内他2015，pp56-77）。

「私は今とても後悔している。なんてもったいない生活を送ったのだろうと。たくさんの人と交流を深めたわけではなく，飲み会や旅行に行くわけでもなく，ただ，毎日同じ店で銀玉を弾いて1日が終わる日々を過ごした」（4年男子）

「K大学にはAO入試，推薦入試を利用して入学してきた人が約5割となっている。つまり大学受験の為の試験勉強を経験しないで入が半数いる。この事実が，この大学の実態を握る鍵だと私は考える。大学受験を経験し，そこで学んだことや苦労し，乗り越えたことなどたくさんあった私からすると少しもったいない気がする。」（2年女子）

「第1志望の大学に入学する夢に破れ，教員養成系の学問領域を修められるという最低限の進学希望条件を死守すべく（K大学に）入学した。私は4年間一貫して知的好奇心の向くままに学業を修めることに邁進し，友人関係の構築や学内行事への参加を軽んじてきた。そのためK大学ならではの良さに気付くのに時間がかかってしまった」（4年女子）

「この大学には『よい人間』と『悪い人間』が極端に存在する。その間にいる人間は，そのどちらかに影響されている。『悪い人間』の行動ははっきりと社会モラルに反している。そのような行動をとる学生も学生だが，強く注意しない先生も問題だ」（2年男子）

「偏差値や知名度で考えるとあまり高い大学とは言えない。しかし周りに大学はほとんどなく，他大学の学生と関わる機会が少なく，社会的チャーターを意識することは少ない。（一方）自分たちの学んでいる語学に自信を持ち，その上位クラスに入ると意識が高まる」（2年女子）

「私は教員採用試験を受けたので，同じ目標や夢を持つ仲間と勉強ができる環境がとてもよかったと思います。（また）先生方が身近にいたので，何か相談ごとがあれば，助けてもらいに行きました」（4年，女子）

これらのコメントから伺われることは，「新興大学」では大学チャーターがほとんど働いていないことである。その大学名は世間的には知られていないし，誇れる偏差値の大学でも，第1志望の大学でもない。入学してみて，大学での学びや資格習得や，同じ目的の学生との交友に喜び見出し，親身な教員の指導で採用試験の合格をめざす。

また，この大学には二種の学生がいるという学生のコメントがあるように，学問や資格習得，採用試験合格に邁進する学生がいる一方で，何となく大学に入り，大学では遊び呆け，授業中は私語やスマホばかりいじっている学生もいる。表2は，成績別にキャンパスライフの違いをみたものである。

このように，「伝統総合大学」や「中堅大学」が比較的偏差値で同質の学生が集まっているのと比較して，「新興大学」では多様な学生が集まっているのが特徴である。

そこの一部の学生達は，具体的な資格取得という目標のもと，教員の親身な指導で，大きく成長していく。高校時代に優秀な生徒の陰に隠れて目立たなかった学生，あるいは部活動に明け暮れ勉強を怠っていた学生が，大学に入り自分才能に目覚める場合がある。そこには，教員の親身な指導が介在している。

一方，高校時代の延長で，目的もなく，アルバイトに明け暮れ，留年したり，就職も決まらず卒業していく学生もいる。このような学生の二極化がかなり進んでいるのが「新興大学」の現状である。どのような学びや成長を遂げるかは，その大学で支配的な学生文化や教員の教育や指導次第ということになる。

5．高校生活と大学生活の関連

高校生活の過ごし方と，大学に入ってからの過ごし方には，相関関係がある。高校時代に本を読まなかった生徒は，大学に入り本を読むということはない。高校時代に受験勉強をした学生はしなかった学生に比べ，大学での学業・勉強の比重は高いものが多い。同様に高校時代の部活動をした学生は大学でもサークル・部活動に比重を置く率が高い。アルバイト，異性との付き合い，ボランティア活動に関しても同様なことがいえる（浜島2016）。

つまり，一般には大学から始める「大学デビュー」は難しく，高校時代の助走が必要である。

このように考えると，高校時代までの教育や生活がいかに大事かということがわかる。大学での教育では遅すぎるのである。

しかし「新興大学」の教員は諦めているわけではない。大学は最高学府であると同時に，社会に出る前の「最終学府」（鷲北貴史）である。したがって，社会に出て恥ずかしくない学力（分数の考え方がわからなければ，分数を大学で教えなければいけない）を身に付けさせ，社会に送り出す責任が大学にはあると考えている。

これは，勉強面だけでなく，態度面にも言える。「新興大学」では大学において学習のリメディアル教育だけでなく，学習態度面のリメディアル教育も必要である。

現在，大学の授業の中での私語や携帯（スマホ）いじりへの対応に，大学教員は苦労している。教室では友達同士でかたまって座り，喫茶店の中のようにおしゃべりをしながら，授業を受ける学生の姿をよく見かける。1分と黙って座っていられない学生もいる。これは高校時代までの授業で身についた習慣である。教師が学生に課題や作業をさせ，机間巡視して学生に声をかければ，私語もスマホいじりも一時的には止めさすことができる。

高校時代までは，卓越した生徒の陰で存在感が薄かった学生が，大学でその天井が取れたことによって，教員に認められ才能を伸ばすことがある。大学は多様な価値が認められる場であり，特異な学生の性向が伸びる場合もある。大学では，抽象的な思考や座学が苦手なものには，専門の実験や実技を多用し，学生の関心を惹くなど工夫している。このように若者の才能が大学で開花することも少なくない。

高校と大学で生徒や学生の情報を交換し，個々の学生の成長にふさわしい進路や教育を施せるよう高大の連携が必要である。

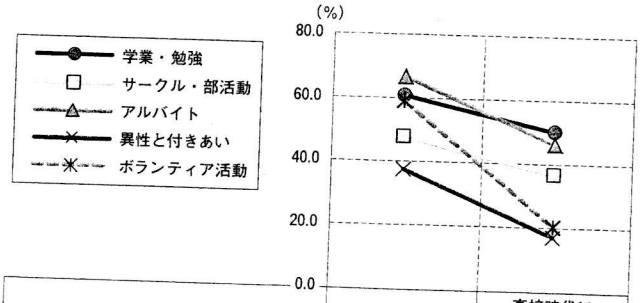
表2　成績別大学生活

（%）

	成績上	中の上	中	中の下	下
勉強の比重（大部分）	50.0	26.4	17.6	11.9	9.1
授業満足（とても＋やや）	60.0	53.6	34.8	23.5	14.5
友人との交友（大部分）	32.4	17.6	15.0	15.0	25.5
アルバイトの比重（大部分）	30.3	12.0	10.5	10.8	30.9

（武内2012，p40）

図1　大学生活の重点（大部分＋かなり）



	高校時代にした	高校時代にしなかった
学業・勉強	60.8	50.2
サークル・部活動	47.5	36.5
アルバイト	66.7	46.1
異性と付きあい	37.3	16.7
ボランティア活動	59.0	20.0

（浜島2016，P113）

【参考文献】

- 武内清編，2005『学生のキャンパスライフの実証的研究―21大学・学生調査の分析―』（科研報告書）。
- 武内清他，2012，『敬愛大生の素顔』。
- 武内清，2014『学生文化・生徒文化の社会学』ハーベスト社。
- 武内清編，2015『現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究―学生の「生徒化」に注目して―』（科研報告書）。
- 武内清他，2015『敬愛大生のキャンパスライフ（その2）』。
- 浜島幸司，2016「子ども期の家族との経験が高校生活・大学生活に与える影響」武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要第6号。

（敬愛大学 特任教授／教育社会学）

Column 社会調査のあれこれ

学部時代に学んだ調査技法

武内 清

敬愛大学国際学部 特任教授

私が学んだ東京大学教養学部の教育社会学コースでは，3年次に「教育調査演習」という必修の授業があり，だれもがこれを経験して卒業してゆく。この授業が学部時代の授業の一番の思い出という卒業生も少なくない。

授業の1コマながら，調査テーマの設定，仮説の構築，調査票の作成，サンプリング，実査，データ集計，分析，報告書の作成，発表（5月祭での発表や冊子の作成）と，社会調査のひととおりのことをぜんぶする。自分たちの手で行うので，調査の全容がわかる。たいへんな苦労と時間を費やすものだが，その後，職場で役にたっているという卒業生も多いように思う。

私の学部生時代は同期6人で，勤労青少年の面接調査を茨城県古河市で行った。面接は，中卒で集団就職して働いている勤労青少年を職場に訪ね，彼らの上司の目を気にしながら，職場満足度や勤労意欲等について尋ねた。聞き逃した項目があると「再度訪問せよ」という命令が指導教官より下り，実地調査のきびしさを学んだ。回答を1枚のカードに写し，それをならべて集計した。そこで縦横にならべるクロス集計という手法も覚えた。1票が大きな重みをもっていた。

後輩たちの「教育調査演習」のテーマは，児童・生徒やその親あるいは大学生を対象にすることが多くなり，その手法も面接調査からアンケート調査に移り，大量のデータをコンピュータで処理するようになった。

集計は大型計算機センターがつかわれ，しかも自分のパソコンでSPSS（予測分析ソフトウェア）という便利なソフトで集計，検定ができるようになっていった。ただ，楽になったぶん，データや集計の重みを軽く考えるようになってしまったように思う。むかしはクロス集計1つ出すだけでもたいへんだった。縦横に調査票を並べ，数をカウントし，検定も手計算で行い，とても手間がかかった。

私の場合は，その後，東京都子ども基本調査，日米高校生比較調査（日本青少年研究所），モノグラフ・高校生調査（ベネッセ），大学生文化調査（科研）など，量的アンケート調査に多く関わってきた。

東京都子ども基本調査では，3年ごとに8回実施し，子どもと親をペアにしてどのような親からどのような子どもが育つかをデータで明らかにした。日米高校生比較調査は「アメリカ＝バラ色　日本＝灰色」という対比の結果が鮮やかに出たが，ことば（翻訳）の問題が最後まで残った。モノグラフ・高校生調査は年3回実施し，四半世紀にわたり，高校（生）のさまざまな側面をテーマにし，明らかにした。大学生文化調査では経年比較で，大学の「学校化」，学生の「生徒化」がデータから明らかになった。

調査の手法は，私たちの時代から大きく進歩している。むかしの世代から何か言うのは時代錯誤のような気もするが，大切に思ってきたことを書き留めておこう。

第一に，たんなる実態を明らかにする記述的な調査ではなく，何のために役だつのかを考えた仮説的（説明的）な調査をすべきであろう。そのさい，因果法則を満たす3つの条件は，必須である（時間的順序，変数の共変，第三の変数の統制――高根正昭『創造の方法学』講談社現代新書，1979年）。

第二に，実在の人間を念頭におくべきである。現代は，複雑な多変量分析から自由回答の分類までコンピュータがやってくれて，高度な解析ができる。しかし，最初に質問に答えるのは生身の人間であり，その肌触りがわかるような分析や考察をすべきであろう。そのためには，調査の初心に返り，質問のしかた（ワーディング），クロス集計といった初歩的な部分も大切にしたい。

第三に，量的調査と質的調査を併用して，現実に迫るべきであろう。そして，出てきたデータが自分の経験や感覚とちがうときは，まずデータや集計を疑い，再点検をすべきであろう。実証はだいじだが，データ至上主義に陥ってはならない。